



## 「地域振興」地域活性化へのプログラム

(社)日本技術士会北海道支部／北海道技術士センター  
 地域産業研究会 幹事長  
 技術士（建設／応用理学部門） 齊藤和夫

### 1. はじめに

「社会貢献」とは、ある辞書によると“世の中のために力を尽くして役に立つこと”とある。技術士が行う企業活動も、つき詰めれば社会貢献と言えるだろう。ただし、この言葉の響きには、どこことなく生計を立てるための本業とは異なる立場で、世のため、人のために役立つことをするニュアンスが漂う。第二分科会の特徴はまさに北海道の地域資源を利用しながら、企業活動とは異なる立場で技術士が実践した姿を描いたものであり、その事例を紹介する。

### 2. 分科会の内容

#### (1) 基調講演 船越 元 技術士（農業／総合）

（地域産業研究会 会長）

北海道技術士センターには現在4つの研究会があり、それぞれが特徴ある活動をしているが、共通しているのはどの研究会も共通の専門分野を有する技術士だけが集まった研究会ではなく、極めて多様な分野から参集していることである。各研究会の設立経緯はそれぞれ異なるが、いずれも21世紀の北海道のために技術士が何をすべきか、何が出来るかを考え、行動することを通して、地域の自立を促すことを目標としている。

その研究会のひとつに地域産業研究会がある。パネル発表にあるエゾシカ分科会、地域活性化分科会も当研究会に属しており、北海道における産業創出や地域活性化に向けた活動を継続中である。この研究会では、地域が自立するためには、その地域に備わった地域資源を最大限活用することが必要であると考え、どの地域にも少なからぬ資源が備わっているはずであるが、私たちの多くは地域の特性や埋

もれた地域資源を見出す努力を怠ってきただけでなく、広く世界を鳥瞰する能力も失いつつあるのかもしれない。

そうした意味で、北海道は今まさに発想の転換が求められており、技術士がどのように地域資源に着目して活性化へのプログラムを具現化し社会貢献をしようとしたのか、事例を示しながら技術士の果たすべき役割を考えてみよう。

#### (2) パネル発表

##### 1) エゾシカ分科会の実践例

五十嵐敏彦 技術士（建設／応理／総合）

エゾシカ分科会が取り組んだのは、農林業被害や交通事故に対する害獣として、じゃまもの扱いされているエゾシカを地域に埋もれた宝として捉え、家畜化することで中山間地に産業を興そうという夢である。

これをこのたび『エゾシカ飼うべ』という本にして世に問うたが、発刊までの5年にわたる活動には次のような3つの特徴がみられる。

■大いなる素人：17名の技術士が拘わったが、誰一人として畜産関係の技術士はいない。しかし、問題解決へのプロセスでは技術士としての手法を大いに発揮し、専門家の情報をコーディネートして自分たちのオリジナルな構想を練り上げた。

■自分のテーマ：エゾシカ問題は誰かに頼まれたものではない。自分たち自身が自分の問題として取り組んだ。もちろん、納期もなければ仕様書もなく、自分たちが納得するまで取り組んだ。しかし、現時点でも完成版ではない。さらに、構想の具体化に向けて新たな課題や検討を継続中である。

■**対象は地元**：この本はあくまでも実際に手掛けるであろう地元を念頭に書いたものであり、役所向けではない。最初から最後まで、エンドユーザーとしての地元の人々を意識した活動である。

この活動を通して技術士の社会貢献の本質は何か？ 生業としての業務の場合には必ずしもエンドユーザーの側を向いていなかったのではないのか？ との問題を提起している。

## 2) 寿都町との地域交流を通して

岩崎元彦 技術士（農業）

地域活性化分科会は、平成11年から漁業と農業を基幹産業とする「寿都町」との交流を通して、地域活性化に向けて2つの視点から研究会活動を続けている。ひとつは、「美しい海作り」研究グループ（海・山・川、農地・都市）であり、あとひとつは「寿都ファンクラブ」の交流を基本とした協働という視点での地域活動である。

当分科会は過去5年間の活動を通して、地域の方々と対等・平等な立場で、同じ視線の高さを持ち、同じ情報を共有し、各々の持ち味を生かした役割分担の中で、活性化について考えていく「場」を創りあげて来ている。

具体的な活動として、「海」「山・川」「農地・市街地」毎の地域資源の中からの「宝物探し」を、また地元の教育委員会と連携した「出前講義」などの地域教育活動の支援活動を行っており、地元の方々と「共に学び」「共に感じ」「共に創る」というスタイルを基本に諸活動を続けている。

技術士の社会貢献とは、専門性を軸とし、多方面の分野に興味・好奇心を持ち、地元と心の触れあう活動であり、そこに社会貢献の原点を見ることが出来る。

## 3) 湿原との触れあい 岡田 操 技術士（建設）

岡田技術士は数年前、環境保護を目的とする財団法人（前田一步園財団）が企画したプロジェクトに参加した。プロジェクトの目的は「現存する湿原の状況を把握しこれを社会全般に知らせる」ことであつたが、具体的な目標はなく、自らが目標・到達

点・方法を設定して実行していかなければならない。このようにボランティアとして、あるいはそれに近い形態のなかで社会活動に参加する場合、手順や方法、目標すら示されていない場合が多く、活動のなかで目標や方法を探って活動を進めていく必要がある。

このような場合、始めから専門性を前面に出すのではなく市民の目線で、市民の感覚と専門性をもった人間としてアプローチすること、活動を長続きさせるためにも自らが楽しみ、真摯に取り組み仲間との信頼関係を醸成していくことも大切である。

岡田技術士は水文技術に加えて、自らが操縦する小型飛行機とカメラワークを駆使して、活動の成果を写真集にまとめた。この成果をとおして、社会に「北海道には、まだまだすぐれた状態の多様な湿原が数多く残されている。」という現状を報告することができた。

湿原の研究者にも新たな事実・現象と研究テーマを提供することができた。今後の活動として社会の開かれた場で、市民と学識経験者との間の隙間を埋める役割を果たすことを考えており、これが北海道の地域資源を生かした技術士の社会貢献と考えている。

## 4) 市民として森に関わる

孫田 敏 技術士（建設）

孫田技術士は緑化計画立案が専門であり、「北の里山の会」という団体で活動している。この会をひと言でいうならば、人が森のサロンに集う会である。実際には森とつきあう術を身につけ、森の心地よさを実感したいという思いで森に入っている。したがって、この会の活動と自分の専門性は密接に関係しているのだが、特に技術者であることを意識したことはほとんどない。謙虚に一市民であることから始め、いろいろな仲間から森とつきあう方法について教を請うている。

私たち技術者は、普段「仕事」の中で森づくりや街づくりの計画に携わることが多い。ところが市民としての立場で関わると、違った見え方はしないだろうか。

会場ではそれらの具体的な事例を示し、過去において人と森との間にどのような関係が営まれてきたのか、「仕事」の延長線上で立案した計画に対して、市民の視線で評価が可能となることを示しながら、技術士の社会貢献について考える。

### 3. おわりに

第二分科会で示した技術士の社会貢献に共通する

特徴は、自分の専門分野以外の分野に対しても積極的に取り組む好奇心と応用能力、創造性があること、ものを観る視点を自分よがりではなく市民レベルに置くこと、また、地元とのコミュニケーションを図り地元の実態をよく知ること、等である。さらにその根底には地域をこよなく愛している人間の姿がそこに見られる。